

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!  
幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!  
被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

## 史料ネット NEWS LETTER

第17号 1999年7月12日(月)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)  
TEL/FAX 078-803-5565

目次	
歴史学研究会総合部会のお知らせ.....	1
歴史学研究会総合部会に向けて 佐賀朝...	2
宝塚の古文書を読む会の会誌発行と、 旧和田家住宅 大国正美...	3
埋蔵文化財問題の動向 藤田明良...	6
第2回神戸大学震災資料についての 研究会 馬場義弘...	6
NPOシンフォニー第1回講演会企画、 成功裏に終わる 辻川敦...	7
シンフォニーの講演会とワインパーティ 参加記 古川明...	8
出版企画 / 『歴史のなかの神戸と平家』...	9
戦争史跡見学・講演会のお知らせ 『火垂るの墓』を歩く / 文献情報.....	10

### 決定!! / 歴史学研究会総合部会で史料ネットについて議論...

開催日 1999年9月18日(土) 時間、場所未定

テーマ 市民社会における史料保存と歴史学 - 阪神・淡路大震災と史料ネット -

報告者と報告内容(予定)

馬場義弘「史料ネットの活動記録とこれまで議論してきたこと」

奥村 弘「問題提起：時代が求める歴史研究のあり方とは

- 史料ネットの活動から考える -」

辻川 敦「問題提起：震災の経験から史料保存のあり方を考える」

#### §

史料ネットではこの間、震災被災史料保全活動をはじめとする史料ネットの活動について、報告書作成と総括の作業を進めてきています。この総括の作業を、史料ネットの内部にとどめるのではなく開かれた形で議論し、震災以来の取り組みの成果や教訓を広く共通認識としていくため、これまでもいくつかの学会・研究会などで、報告や議論の場を設けてきました。

これについて、上記のとおり歴史学研究会の総合部会で、本格的な議論の場を持つこととなりました。被災史料保全活動に参加された方々をはじめ、広く歴史研究者や史料保存関係者の皆さんに参加していただきたいと考えています。

ぜひ、ふるってご参加ください。

(なお、今回は歴史学研究会総合部会として関東で開催しますが、時期を見て関西でも、同様の場を持ちたいと考えています。)

### “史料ネット News Letter” の購読を!!

史料ネットでは“News Letter”を年間4号発行しています。史料ネットの取り組みに関心がある、あるいは支援したいという方、ぜひ郵送購読をお願いします。年間購読料(郵送料)500円で受け付けています。下記支援募金口座に「ニュース郵送購読希望」と明記してお振り込みいただくか、あるいは電話、FAX、e-mailのいずれかの方法で史料ネットセンターまでお申し込みください。

あわせて、史料ネットの活動を支える募金協力についても、よろしくお願いいたします。

なお1999年度の4号分は、今回の第17号から、第20号までとなります。

### 史料ネット活動支援募金 (郵便振替)

名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

## 歴史学研究会総合部会に向けて 佐賀朝

史料ネット活動報告書（仮題）の総論をまとめていくための議論の場としては、さきに大阪歴科協5月例会「阪神大震災と歴史学徒 - 現代歴史学の課題との関わりで - 」を開催しました（内容等は後述）。そこでの議論とその反省をふまえ、本ニュース第1頁で紹介したとおり、歴史学研究会総合部会「市民社会における史料保存と歴史学 - 阪神・淡路大震災と史料ネット」を9月18日に東京で開催することとなりました。

歴研総合部会で予定している論点

この総合部会では、まず史料ネットの活動経過に即して、われわれが突き当たった様々な具体的論点 - 例えば救出史料の仮整理をボランティアでやるべきか否か、など - とそれをめぐる議論や対処の経験を紹介する馬場報告をメインとし、それぞれの場面での判断にどのような意義と限界があったのかについて再考し議論したいと思います。また、奥村・辻川両氏からは史料ネットの活動から得られた論点をふまえて、市民社会のなかで歴史研究が果たすべき役割は何なのかについて、地域史研究を専門とする歴史研究者の立場から（奥村）、史料館で史料保存に携わる立場から（辻川）、それぞれ論じます。

史料ネットの活動からわれわれが得た論点の最も主要な一つは、災害時における史料保存の問題は狭い意味での災害対策や「危機管理」の問題なのではなく、むしろ問われているのは日常的な社会のなかでの史料と歴史研究の意味そのものなのではないか、という点です。その点で被災地の問題が提起する課題は、市民社会のなかでわれわれがいかに史料保存をすすめるのか、歴史研究をすすめるのか、という普遍的な課題と無関係でないばかりか、それこそが鋭く問われていると考えるものです。

9月の企画には歴史研究や史料保存に関わる多数の方々に参加され、活発な議論が展開されるよう強く期待しています。  
大阪歴科協5月例会の記録

さる5月16日に東淀川勤労者センターで開催した、大阪歴科協5月例会「阪神大震災と歴史学徒 - 現代歴史学の課題との関わりで - 」の内容を報告します。参加者は約30名でした。

当日は、史料ネットから寺田匡宏氏が「震災体験と歴史学徒 - 現代歴史学と同時代 - 」と題した報告を、同じく代表幹事の奥村弘氏が「史料ネットから学んだこと」というコメントを行いました。

寺田報告はまず、史料ネットの活動を、他のさまざまな震災ボランティアとの比較を通じて意味づけ、そこには活動を通じて歴史や史料あるいは歴史研究と社会との関係などをめぐる認識の深化が多様な形で見られ、参加した歴史学徒にとって単なる史料救出にとどまらない達成があったことを指摘しました。また寺田氏は、

震災に触発されて生じた歴史研究者の様々な反応・対応のいくつかに言及し、そこにも災害史への注目といった範囲だけにとどまらない形で現代社会から歴史への問いが発せられていること、「災害文化」（外岡秀俊『地震と社会』）という考え方、あるいは歴史や現代社会を捉える際の「拠点」の問題（大門正克）など、震災で生じた様々な問題を通じて歴史学と現代社会との関係を回路づける視座が模索され、提起されようとしていると指摘しました。

奥村コメントは、史料ネットの活動から一人の研究者として学んだ点として、史料を市民社会と共有するあり方についての考え方が変化したこと、歴史学の実践性という問題をめぐって歴史研究や歴史像構成と社会形成の関係をより積極的な形で見直していくべきこと、地域の歴史イメージの多様性・多層性（例えば、国民国家論的に一面化するだけでは済まない問題の構造など）を再認識したことの三つを挙げました。

討論では主として寺田氏の論点を中心に議論が展開し、どのボランティアにも見られる専門性や専門家の役割と、いわば「すぐには役に立たない」史料の保存をうったえ支援した史

料ネットの「専門性」との違いの問題、ボランティアに参加して揺さぶられた主体の意識がそこにとどまるのか、そこから新たに社会の側を問い直す視点や方向性を見出すのかという問題などが議論されました。

また、震災と史料保存をめぐることは、社会にとって、破壊された町並みや、さらには失われた人間そのものがいわば「史料」であり歴史性を体現するものであり、災害や災害文化のあり方によってそうした歴史性が切断されていくこと、あるいはそこで切断された歴史を回復しようとする要求が生じるという問題が、さらに大門氏がいう「日常のなかでの問題の見えにくさ」という点をめぐっても、震災に直面することで否応なしに現実と向き合い、何かを掴みつつあるという問題、あるいはその点と外岡氏がボランティアとは「分限を越えること」と定義

していることとの関連、などなどが論じられました。

他方、史料ネットの議論の仕方は内向的であり、もっと地域における具体的な史料保存をめぐる提言を前面に出すべきでは、との意見も出されました。

多様に提出された論点をその場で深めるのは容易ではありませんでしたが、震災そのものや史料ネットの活動から、それぞれの歴史学徒が何を発見し獲得しつつあるのか、という核心的問題をめぐって今後発展させるべき視点や論点がいくつか出されたと言えます。

9月に開催する歴史学研究会の総合部会でもこうした議論をふまえつつ、さらに皆さんと認識を深め合い、共有していきたいと考えます。  
(さがあした、桃山学院大学文学部講師)

**宝塚の古文書を読む会の  
会誌発行と、旧和田家住宅  
大国正美**

史料ネットがサブプロジェクトとして続けている宝塚の古文書を読む会が、初めての会誌『源右衛門蔵(げんよみぐら)』を発刊した。参加する市民が世話人会を結成し、執筆依頼、ワープロ入力、編集、業者との交渉まで、研究者の手を借りずに自力でやり遂げ、市民主体の調査・研究活動の一里塚になった。またテキストとして使用している米谷村・和田家の旧宅が、修理復元され7月1日、宝塚市立歴史民俗資料館・旧和田家住宅として開館。地道な史料保存運動は、新たな展開をみせようとしている。

和田家文書は、かつての『宝塚市史』編集の際に約400点が発見され利用された。ところが阪神・淡路大震災で約3,000点を新たに発見、95年7月、史料ネットが救出した。史料ネットは、ボランティアで仮整理を行い、それを受けて宝塚市史資料室も目録印刷費用や全点のマイクロ撮影・焼き付け費用を予算化した。尼崎市や西宮市、伊丹市のように市史刊行後、史(資)料館や博物館へと修史事業が拡大したのに比べ、宝塚市では、史料館構想の頓挫、人員の縮小な

ど、史料保存にとって厳しい環境が続いていただけに、史料ネットと行政協力の成果のひとつになった。

宝塚の古文書を読む会は、史料ネットと市との信頼関係が醸成される中、研究者と市民の史料に対する認識のギャップを埋めようと、96年5月から市と共催で3回の古文書講座を開催したのがきっかけになった。予想を大幅に上回る130人の市民が参加、自主講座の形で継続を望む声が強く出て、同年7月に読む会が発足、以来第2日曜日の午前中に市史資料室のある宝塚市立中央図書館の大会議室で開催されている。チューターは伊丹市立博物館の石川道子さん、関西大学の木村修二さん、大阪市立博物館の八木滋さんと大国が、ボランティアで交替で担当。受講生は和田家当主の和田正宣さんをはじめ現在44人。参加者の熱意は3年前から失せることなく続いている。

会誌発行は、「読む会をチューター(研究者)から受講者(市民)への一方通行で終わらせたくない。受講生からも発信する機会を設け

よう」との視点で、当初から視野にあった。読む会では、年配者が古文書に現れる世界と自分の体験との接点を回顧風に披露するなど、自由な雰囲気が進んでおり、その土壌は最初からあった。しかし、会誌発行を研究者がすべてやってしまうのは「一方通行の関係」を助長することにもつながる。そこで発案したのが、受講生の中から希望者を募り世話人会を発足する方法だった。幸い和田さんをはじめ8人の方が賛同してくれた。

以来、世話人会は、われわれチューターを抜きに、読む会の後や別途日時を合わせて集まり、体裁や内容の吟味を重ねた。会員に原稿を募ったところ18人が投稿、これにテキストとして使った享保19年（1734）の触留（米谷村領主の飯野藩）、天保改革の触留（幕府法）の原文を載せた。この間、われわれチューターがかかわったのは、史料原文の校正・読みの統一が中心で、時折報告を受けてアドバイスする程度。業者も見積もりをとり世話人会が決めた。口絵には和田家の被災写真や読む会で行った見学会、修復後の遠景、古文書の写真などを4ページ。これら写真撮影まですべて世話人手作りとなった。タイトルや挿絵も、世話人の知人で、京都在住の書家・松本恵泉さん、市内波豆の普明寺住職・湯浅徹雄さんを捜し出し、協力を得た。

内容は創刊号とあって、会に参加した動機や現在の心境が多いが、地元の民俗踊りの紹介、近世の俳諧と酒造の緊密さ、庄屋の質入れ証文を通じた村借り、清荒神の住職のネットワーク、近世の女性の地位や名字、享保改革の狙いを論じたりと、古文書を通して見える世界へいざなう内容も豊富だ。今や年1回の発刊に向けた世話人会のパワーに我々が圧倒される今日このごろ。研究と無縁だった市民といえど、書くほどに研究の深みを増すことは、これまでの多くの事例が物語っている。2号以降は世話人の督促に締め切りを守ろうと心に誓っている。

… … … … … … … … … … … … … … … …

この読む会の会誌発刊と軌を一にするかのように、和田家の修復が終わり、市立歴史民俗資料館・旧和田家住宅としてオープンした。7月1日には、市長をはじめ行政関係者も多く参加してオープンセレモニーが行われた。テレビの取材も相次いだ。

和田家住宅は摂津・丹波型といわれる妻入角屋本瓦葺の住宅で、古式な納戸構えを持っており、17世紀末から18世紀ごろに建てられたと推定される。震災で半壊したが、古建築学の研究者の保存を望む声が強く修復保存されることになり、96年4月、宝塚市指定文化財になった。和田さんは家を土地とともに市に寄贈した。

和田さんは、元々、史料保存に関し、深い理解と強い意志をお持ちの方であった。「古文書は研究者に貸すと戻って来ない」という父の遺訓をよく守り、市史編纂の時も古文書は門外不出。編集室が通いで調査したほどだ。史料はこうした強い意志でこれまで地域社会の中で保存されてきた。しかし、あの地震で住居が半壊しながらも古文書を守り、また拝金主義が横行するこの世の中で、家の保存のために土地まで寄付される心意気には、全く脱帽のほかない。和田家のケースは今はレアケースだ。

しかし、世間も捨てたものじゃない。こうした和田さんの周りに、史料保存に関心を持つ人々が集い、市民、研究者、行政の枠を越えたネットワークが形成された。読む会会誌発行は小さな一歩だが、そのネットワークのひとつであり、史料ネットで提唱している「不特定多数の史料を包含する地域社会」の構築に向けた大事な一歩でもある。

和田家の例は、震災の危機を乗り越え、古文書とその作成された場が共に保存され、活用されるという好例になった。その中の一員でいることに、静かな喜びを感じる。このモノと場をどう活用し、発展させるか。和田家の事例を将来もレアケースにしてしまわないために、そして「不特定多数の史料を包含する地域社会」の構築のために、むしろ今後の取り組みこそが問われている。（おおくにまさみ、神戸史学会、神戸深江生活文化史料館副館長）





## 埋蔵文化財問題の動向

藤田明良

前号でお知らせしたように、史料ネットでは考古学の専門家を交えて、震災後の埋蔵文化財問題を総合的に検証する作業を始めることになったが、調査の主体である行政からも、同様の動きが出てきた。すなわち兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、今回の震災の教訓を埋蔵文化財の視点から検証し、巨大災害からの復旧・復興事業と埋文調査の在り方の指針を探るシンポジウムを企画し、史料ネットにも実行委員とパネリストを出すことを要請してきた。

これを受けて史料ネット事務局長の藤田が、7月1日の第1回実行委員会に参加し、シンポ

でネットの活動をふまえた意見表明を行なうとともに、市民の声を反映するため「猪名庄遺跡を学ぶ会」からもパネリストを出すことになった。

このシンポジウムは、12月4日(土)午前10時30分から、JR新長田駅前のピフレ新長田3階大ホール(定員441名)で、開催される予定。当日は県教委などの報告と、埋文関係者・ジャーナリスト・文化庁の意見表明などが行なわれる予定。(ふじたあきよし、史料ネット事務局長、天理大学講師)

## 第2回神戸大学震災資料 についての研究会

馬場義弘

1999年6月14日、神戸大学において第2回目の「神戸大学震災資料についての研究会」が開催された。阪神・淡路大震災記念協会、兵庫県公館(県政資料館部門)、尼崎市立地域研究史料館、神戸大学附属図書館など震災資料をあつかう各機関の担当者のほか、神戸大学からは岩崎信彦氏(文学部、社会学)、室崎益輝氏(都市安全研究センター)、奥村弘氏(文学部、史料ネット代表幹事)が、また史料ネット関係者も参加した。

はじめに震災資料の収集・保存に関して各機関からの現状説明があり、そのあとで意見交換をおこなった。以下では、そのときに出た意見をいくつか紹介する。

まず震災資料のうち公文書については、所在確認作業の成果が十分に上がっていないという意見があった。そのため震災時における民間団体の動きは資料から分かるが、「震災対策本部」のような公的な機関の活動内容については、それを知るための基本資料が所在不明になって

いる自治体があるという。

次に、文書資料とともに聞き取り調査の重要性を指摘する声が多く出た。聞き取り調査についてはすでにいくつかの機関において取り組みが始まっており、文献資料と相まって震災像を明らかにする貴重な資料となる。

収集資料目録の編集方法についても議論がなされた。資料目録を一見してどの分野の収集が欠けているのかがわかるような作り方をすると、今後の方針も立てやすいとの意見が出された。

今回の研究会では、震災資料を扱う諸機関が、お互いの業務内容と実情を知ることができたことに意義があった。出席者からは、今後このような会合を密にもち、連携することで、お互い成果をあげることができるであろうとの期待が述べられた。

なお、この研究会は科研「被災史料保全活動からみた都市社会の歴史意識に関する研究」(代表、鈴木正幸氏)の一環として開催された。(ばんばよしひろ、滋賀大学文学部講師)

## N P O シ ン フ ォ ニ ー 第 1 回 講 演 会 企 画、 成 功 裏 に 終 わ る 辻 川 敦

前回のニュースで予告していた、N P O シンフォニーによる講演会企画「まちづくり歴史文化交流事業、講演と交流の夕べ第1回」が、1999年5月29日(土)に尼崎市中小企業センターにおいて開催され、成功裏に終了した。

N P O シンフォニーとは...

この企画を開催したN P O シンフォニーとは、尼崎に本拠を置くN P O (非営利法人)である。シンフォニーは、阪神・淡路大震災直後から、避難所や仮設住宅で続けられてきた被災者自立支援のボランティア活動が母体となって組織された団体であり、仮設から復興住宅への引越し事業や復興住宅での自治会づくり支援など、さまざまな成果をあげてきた。このほど、事業の対象を被災者自立支援から市民によるまちづくり全般に広げ、N P O 法による認証も受けて新たに非営利法人としてスタートしたものである。

シンフォニーは、震災体験の記録化や資料保存にも積極的な意思を示しており、この分野では従来から史料ネットとの協力関係にあった。

まちづくり歴史文化交流事業

シンフォニーが取り組む事業は、福祉・生活・環境などさまざまな分野での市民によるまちづくりやコミュニティ活動、情報の交流などである。そのなかで、まちづくりに歴史文化を活かしていく場づくり、ネットワークづくりを位置づけたのが「まちづくり歴史文化交流事業」であり、その具体化の第一弾として「講演と交流の夕べ」が実施されたわけである。

この企画での講師と講演内容の設定については、それを学んだ市民自身が、具体的な歴史文化まちづくりに足を踏み出していけるような、アクティブかつ地域性・具体性に富んだものが追求されている。また講演会に加えて、講師と参加者、スタッフたちが交流する手作りのワインパーティがセットされており、一方通行の勉強会ではなく、企画者・講演者と参加者の双方向の交流、それを通じてのネットワークづくりが目指されている。いずれも、史料ネットが従

来から取り組んでいる市民講座や各地域でのサブプロジェクトと軌を一にしており、それをさらに徹底したものと言える。

第1回講演と交流の夕べ

その第1回となった5月29日の講演会には、まちづくりに関心を寄せるさまざまな分野からのメンバー約50人が参加、パーティにも約40人が参加した(いずれもスタッフを含む人数)。講演会では、まず建築史家の川島智生氏が、自身の主宰する「阪神間・都市と建築の会」による建築・町並みウォッチングの成果を踏まえて、尼崎の旧城下町に残るさまざまな近代建築遺産と都市形成の歴史を紹介した。続いて阪神地域をはじめとするさまざまな場での文化事業に関わる河内厚郎氏が、その経験をまじえながら今後の歴史文化まちづくりへの提言と苦言を述べられた。時間の関係もあって質疑応答はできなかったが、内容面では大いに好評であった。

それに続く、スタッフやボランティアによる手作りのワインパーティは盛り上がりすぎるほど盛り上がり、予定時間を超過して3時間以上にわたり、参加者がグラスを片手に会話し人の輪が広がっていく光景が見られた。なおこのパーティの設定と進行については、ボランティアとして協力していただいたソムリエの横田輝一氏と、ワインやビール、パンを寄付していただいたメーカーおよび協力者によるところが大きかった。

評価と反省点、今後の展望

このように、今回の取り組みは、第1回目として一応の成功を収めたと言える。シンフォニーのスタッフたちも、市民による歴史文化を活かしたまちづくりへの参加と交流の要望が少なくないこと、その実現についてN P O に寄せられる期待が大きいことを、実感できたようである。その一方で、P R がかならずしも効果的ではなかったこと、受付事務に若干の混乱があったこと、交流の時間が個々ばらばらの形となり、参加者全体としての意見交換の場がほとん

ど持てなかったこと、パーティの飲食物など多くの寄付があったにもかかわらず、準備に要した人件費などを考慮に入れた場合には経費が持ち出しであったことなど、反省点も少なくない。シンフォニーとしては、今後はこういった点を改善しながら、同様の企画を3～4回程度続け、そこでの参加者を核とした新たな人のネットワークを形成し、そのメンバー自身による新たな事業展開、歴史文化を活かした具体的なまちづくり事業の実現という方向性を、めざしていく予定である。また史料ネットとしては、講師の紹介やPRなどの面で、引き続きこの事業への協力を続けていく予定である。

以上に見るように、このシンフォニーによる事業は、史料ネットが従来から取り組んできている地域での取り組みを、さらに地域密着・市民主体で推し進めようというものであり、研究者・専門家を中心とするボランティア団体である史料ネットと、市民による取り組みとの新たな関係の方向性を示唆するものであるとも言える。他の地域や分野でも、同様のNPO的な取り組みが活発に展開されていくことが期待されるし、その醸成や支援に向けて、史料ネットとしても努力していく必要があるであろう。

なお、シンフォニーによる講演と交流の夕べの第2回は、園田学園女子大学の田辺真人氏の協力を得て、本年10月に開催の予定である。(つじかわあつし、尼崎市立地域研究史料館)

NPOシンフォニー第1回講演会で、川島智生氏が紹介された、尼崎旧城下町の近代建築遺産については、『歴史と神戸』誌上でも見ることができます。

神戸史学会発行 『歴史と神戸』

38巻3号(通巻214号) 1999年6月発行  
川島智生「尼崎・城下町の近代化遺産」  
<阪神間の近代をあるく - 歴史的建築から  
視る都市の相貌>第1回(今後連載予定)

『歴史と神戸』は年6回発行、  
年間購読料2,000円。1冊単価は420円。  
購読申し込みは下記まで。

〒657-0845 神戸市灘区岩屋中町3-1-4  
田中印刷内 神戸史学会 TEL078-871-0555  
振替口座 0290-2-4018

## シンフォニーの講演会と ワインパーティ参加記

古川 明

歴史大好き雑学人間です。歴史資料ネットワークからのご案内をいただき、川島智生先生の貴重なお話や、新聞・テレビ等で拝見している河内厚郎先生にお会いできることを期待して、出席させていただきました。同時に、NPOシンフォニーのご活動の詳しい内容にも強い関心があったので、NPOの皆さんにもお会いでき、大いに勉強になりました。

これまで断片的には、尼崎や西宮等の貴重な建築物の歴史を新聞や他の資料で拝見し、興味を持っていましたが、今回のように映像にきっちりまとめてご説明をいただき、あつという間の貴重で楽しい時間でしたし、多くの方々がこのようなユニークな研究に接することを、期待しておられるのではないのでしょうか。博士号を保有しておられる川島先生の、高いレベルのお話を聞く機会を得たことを感謝しています。

著名な河内厚郎先生が、風邪をひいておられるのに、情熱を込めて、大阪の忠臣蔵を含めて、先生の専門分野の演劇史等々、先生の博学博識は以前から聞いておりましたが、ただただ頭の下がる思いでした。

両先生のお話は、時間が短すぎると感じるくらい豊富な内容で、もっともっと多くの人に聞いてほしい学術的な内容を聞くことのできた、貴重な時間でした。

そしてハイライトは、ソムリエの横田輝一さんによる、パーティでのワインのお話でした。知っているようで、いざとなるとあまり知識のないワインのことを丁寧に説明していただき、大いに勉強になったことを感謝しています。そしてこのワインのおかげで、河内先生や川島先生ともお話しさせていただく時間があったことも、ありがたい機会でした。

また、NPOシンフォニーの皆さまのご活動の内容を今回現場で拝見し、NPOの何たるかについて勉強できたことも、喜んでいます。

(ふるかわあきら、関西アメリカンフットボー

史料ネット関連出版企画

( 仮題 ) 『歴史のなかの  
神戸と平家』

神戸新聞総合出版センター発行(10月発行予定)

予定価格1,800円

~~~~~  
内容目次

- 永井路子「平家物語の時代と神戸」  
足利健亮「清盛時代の大輪田泊と福原と和田京」  
須藤 宏「地中から語る清盛の時代」  
高橋昌明「福原の夢 - 清盛と対外貿易」  
保立道久「神戸と『方丈記』の時代」  
坂江 渉「古代国家と神戸の港」  
藤田明良「清盛塚と鎌倉時代の兵庫津」  
森田竜雄「関屋町と中世の港湾管理」  
大国正美「名所記にみる平家伝承の定着」  
奥村 弘「神戸開港と都市イメージ」  
他

~~~~~  
本書は、1997年9月に神戸市東灘区の御影公会堂で、作家の永井路子氏を招いて開催した史料ネットによる第7回市民講座「清盛と福原京の時代 被災地神戸の歴史をふりかえる」での講演や関連報告・スライドを中心にまとめたものです。神戸の歴史像や、住民の歴史認識についての新しい視角や成果を取り入れた内容となっています。

10月刊行に向けて鋭意編集中。刊行後は、記念講演会やウォーキングなどの企画も、予定しています。

なお、前回のニュースでは6月刊行予定とお伝えしましたが、発行が予定より遅れています。誌上からではありませんが、読者の皆さんや関係各位にご迷惑をおかけしましたことを、謹んでお詫び申し上げます。

## 戦争史跡見学・講演会のお知らせ

### 『火垂るの墓』を歩く

野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』の舞台となった西宮の戦争史跡をたどります。

日時 1999年8月8日(日)午後1時～4時30分頃

コース 午後1時 阪急甲陽園駅改札口集合 甲陽園地下壕見学 満池谷墓地  
神原公民館 ニテコ池 大社小学校メモリアルホール 阪急夙川駅方面

説明 コース説明および、神原公民館でのお話し。

鄭鴻永氏(兵庫朝鮮関係研究会) 佐々木和子氏(地域史研究者)

正岡茂明氏(西宮北高等学校)

参加費 200円

定員 50人(定員を越えた場合は、参加をお断りする場合があります)

主催 『火垂るの墓』を歩く実行委員会

協力 歴史資料ネットワーク

申込方法 歴史資料ネットワーク(下記奥付参照)まで、TEL、FAX、郵便または  
e-mailにて、住所、氏名、TEL番号を添えてお申し込みください。

注意事項 地下壕を見学しますので、運動靴等でご参加ください。  
また、懐中電灯をご持参ください。

## 文献情報

『阪神・淡路大震災復興誌』第3巻(1997年度版)1999年3月(財)阪神・淡路大震災記念協会発行

『阪神・淡路大震災関連収集資料目録 平成11年1月末現在』同前

『文化財は守れるのか?「阪神・淡路大震災の検証」』文化財保存修復学会編

1999年6月 クバプロ発行

濱田恵子「太田北山教育史料 - 西宮市の家文書を中心に - 」

中山睦男・奥村弘・佐々木和子・内堀憲司「避難所となった市立稲野小学校の状況」

以上2編『地域研究いたみ』28号(1999年3月)

大国正美「田中源左衛門家史料の仮整理を終えて」

『Network』(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会会報)14号(1999年3月)

塚田孝「歴史学の方法をめぐる断想 - アメリカでの経験にふれて - 」

『市大日本史』(大阪市立大学)2号(1999年5月)

関山麻衣子「神戸市東灘区連続三二歴史講座「古文書が語る森地区の歴史」に参加して」

『地方史研究』49-3(279)号(1999年6月)

\*\*\*\*\*

このニュースは、NIFTY-Serveの歴史フォーラム・歴史館2番会議室

「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。

史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さん

のご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。

<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists/>

または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

\*\*\*\*\*

史料ネット NEWS LETTER No. 17

1999.7.12(月)

編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp

